

続
とちぎの
サムライ
vol.30

ここ数年、城址歩きをしていると、さまざまな城と歴史に関わることになります。毎回のことですが、自分勝手に書いておりますので、史実と異なる部分があるところはお容赦願います。

(一社)宇都宮建設業協会 木澤喜人

全国津々浦々 お城めぐりの旅

土佐から
天下を夢見た
男の城

今回は、土佐から天下取りを夢見た男の話です。私は、「高知」というと山之内一豊、「土佐」というと長宗我部元親がイメージされます。土佐に行く現地では元々の領主であった長宗我部元親が圧倒的に存在感があるように感じました。高知の一土豪でしかなかった長宗我部元親は、天下取りというとんでもないことを考えていた男でした。当時、天下取りの話で名前が出るのは、甲斐の武田信玄・越後の上杉謙信・中国の毛利・京の三好あたりで、美濃の織田や奥州の伊達なんかは、まだまだ土俵外でした。元親は取りあえず土佐を平定、次に四国を統一したとすると瀬戸内海を挟んで毛利と対峙することになると考え、その時のために今から織田信長と縁を結んでおこうと思いました。なぜか信長に目を付けたのは先見の明があったようです。

それでは、長宗我部元親を「クローズアップ」していきましょう。1539年(天文8年)に長宗我部国親の長男として岡豊城に生まれました。元親の父の国親が本山氏の長浜城を奇襲し攻略した時、長浜城主は、本山茂辰に急を告げ、長浜城奪還のため押し寄せてきた本山軍と長宗我部軍が「戸の本」で対決。その時が元親22歳の初陣でした。本山氏に勝利した後、国親の死後に元親は長宗我部第21代当主となりました。



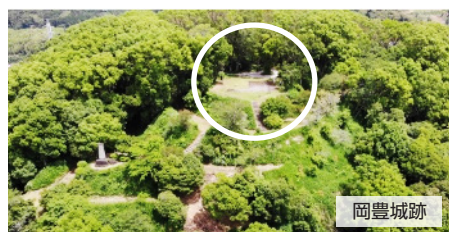
初陣で元親が必勝祈願した若宮八幡宮



戸の本古戦場跡



初陣の戦勝祈願をした時の長宗我部元親公の銅像。高さは台座も含め約7m。槍の長さは5.7mあります。



岡豊城跡

岡豊城の本丸にあたる曲輪。標高97mの岡豊山の頂上部にあります。一辺約40mのほぼ三角形をした曲輪です。



岡豊城・詰(本丸)

その後、長浜城奪還のため押し寄せた本山勢2千5百と長宗我部勢1千が対決。元親は「姫若子」と呼ばれ、槍の使い方もよく分からないでの出陣でした。この初陣で20騎ばかりの手勢で本山勢を打ち破るといふ、誰も予想をしなかった戦果を挙げ、勝利した後は「土佐の出来人」・「鬼若子」と呼ばれる武将の片鱗を見せはじめたのでした。

元親は、生まれてから四国をほぼ平定するまで岡豊城を拠点としていました。その頃の土佐は、中央部に長宗我部氏、北部山岳地帯に本山氏、西部高原地帯に一条氏、東部に安芸氏と4つの勢力圏に分かれていました。その中でも本山氏は元親の父の代から争い続けている難敵でした。本山城は高知から直線以北に約30kmの山中に位置していました。元親は、まず四国きっての堅城といわれていた本山城を攻め、本山氏を降伏させようと考えました。

元親は本山城を最初に力攻めをした後、調略を使ったり流言を流したりして、本山城内に疑心暗鬼を蔓延させ、多くの犠牲を出すことなく落城させ、本山氏を叩き落としたのでした。長宗我部軍が強力だったのは、「一領具足」という制度で組織されていたからだと思われます。

一領具足は、わずかな田地を耕し、かたわらに日頃から弓・鉄砲・太刀打ちを訓練していて、いざ戦いの合図があると鎌・鍬を放り投げて、馬で走り回った命知らずの野武士たちで、二〜三町くらいの田地を所有し被官・下人を抱えた在郷の名主だったようです。



本山城主郭(城址碑)



一領具足



安芸城

安芸城は安芸氏代々の居城でした。安芸国虎は中村城の一条氏と連携し、軍勢を率いて岡豊城を攻撃しました。しかし、これは失敗に終わり1569年(永禄12年)長宗我部元親の攻撃に敗れ、その後は長宗我部氏が約30年間支配しました。国虎は安芸城に籠城して抵抗しましたが、城内に寝返る者が続出し、井戸に毒を投げ込まれるなどしたため、国虎は命と引き換えに家臣や領民の助命を元親と約束し、城下の菩提寺、浄貞寺に入って自害しました。こうして安芸氏は滅亡したのでした。

元親は武力・調略を駆使し、紆余曲折を経ながら15年かけて土佐を統一することができました。すぐさま近隣諸国に攻め入り、四国を征服してしまうつもりでした。以前、信長に四国征伐の話をした時には「四国は切り取り放題にせよ」と言われてもいたので、念をいれるべく織田信長に使いを出しました。ところが阿波・讃岐・伊予に昔から根を下ろしていた三好氏が信長に泣きつき、長宗我部の攻撃を止めてもらうよう懸命に働きかけました。信長は三好氏と長宗我部氏を天秤にかけ、先々どちらが扱いやすいかを考え結局三好氏を選びました。ここにきて信長は、見も知らぬ長宗我部と同盟を結ぶ義理はないと考え、土佐一国と阿波の南部は与えてやるが残りすべて差し出すよう命令しました。この命令は、元親にとって青天の霹靂でした。元親は織田の家来でもなく、援軍を頼んだのでもなく自力で勝ち取ったことなのに、高飛車な命令に激怒して信長との戦も覚悟しました。ところが世の中は何が起こるか分からないのです。なんとここで「本能寺の変」が起きて明智光秀が本能寺を襲い、信長は自刃してしまいました。そしてたった11日間で明智政権が崩壊したのでした。天下取りのチャンスと見極めた秀吉は、織田政権の相続者である位置を順次固めはじめました。秀吉は次々に大名を撃破・恭順させ、とうとう四国征伐で長宗我部に焦点を合わせることになりました。信長と同じように一方的に「降伏せよ、そうしたなら土佐一国を与える」と通告しました。信長に続き秀吉にも上から命令され怒り心頭の元親は、大阪に使いを出し現状を調べさせました。しかし、土佐から出たこともなく、何の情報も知らない長宗我部の重臣が見たものは、カルチャーショックなんてものではなく、同じ時空でこんなにも時代が進んでいることを目の当たりにし、頭が真っ白になったことと思います。使者は大急ぎで土佐に戻り、元親に命を賭して降伏を訴えました。聞く耳を持たない元親に、重臣たちは「秀吉軍は長宗我部軍の数倍の規模でいつでも出動できます。我々は戦を恐れることはないが、20年の戦いで疲れ果て、山野は荒廃しこれ以上戦が続けばみんな餓死するだけです。」と訴えられ、さすがに元親も折れざるを得ず秀吉に降伏しました。その結果、土佐一国のみを与えられただけでした。元親は、俺は生まれる所を間違った、秀吉のように尾張で生まれ、家康のように三河で生まれていたら間違いなく彼らと覇権争いをしただろうというじくじたる思いに苛まれました。次の年、元親・信親親子は秀吉の九州征伐に従軍しましたが、嫡男信親が戸次川の戦いで戦死してしまいました。時が過ぎ53歳となった元親は、嫡男の信親を亡くし失意のうちに山城の岡豊城から桂浜の浦戸城に移ったのでした。そして元親は秀吉の配下として文禄・慶長の役に家督を継いだ四男の盛親とともに従軍しました。



桂浜



高知市史跡 浦戸城天守跡



元親公の墓

長宗我部元親は、61歳で京伏見の宅邸にて病死しました。さてその後、長宗我部盛親は関ヶ原の戦いで西軍につきましたが、敗色濃厚と見て戦わず帰国し、徳川氏に詫言を入れしました。しかし、帰国直後に重臣たちが浦戸一揆を起こしたことをとがめられ、領国を没収され浪人となったのでした。のちに大坂の陣が勃発した時、豊臣側から「勝利した時は土佐一国を与える」との条件で戦闘に参加しましたが敗北。再起を図るため、逃亡したのですが捕らえられて処刑されました。



山内一豊が築城した高知城

長宗我部が消滅した後、徳川家康は関ヶ原合戦の論功行賞を行い、掛川城主・山内一豊を5万石から、土佐20万石の大々名に昇格させました。井の中の蛙を絵に描いたような長宗我部は、やはり四国という立地のハンディを越えることができなかつたのだと思います。私には何の関係もありませんが、権力・財力という力とはとてつもなく魅力的なものなんじゃないか？